

## シンポジウム筆録

2023 年度全カリシンポジウム

# 外国語による総合系科目（F 科目）の成果と課題

日時：2023 年 12 月 6 日（水）18 時 00 分～20 時 00 分

開催方法：ハイブリッド型開催（対面・オンライン）

池袋キャンパス7号館1階7102教室およびZoomウェビナー同時配信

登壇者：

〈検証報告〉

後藤 雅知（全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／文学部教授）

〈事例報告〉

田村 俊行（立教学院史資料センター助教）

長谷川 アリソン（外国語教育研究センター特任教授）

今井 祥子（全学共通カリキュラム運営センター兼任講師）

司会：

筧 三郎（全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームメンバー／理学部教授）

**筧(司会)** 最初に、全学共通カリキュラム運営センター部長の法学部浅妻章如先生からご挨拶をいただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

**浅妻** 2023 年度より全学共通カリキュラム運営センターの部長を拝命した浅妻章如と申します。はじめに、本日のテーマである外国語による総合系科目（F 科目）について少しご説明申し上げます。

全学共通カリキュラム運営センターでは、立教大学のスーパーグローバル大学創成支援事業（TGU）の一環として、多様化するグローバル化社会に向けて必要な知識、思考を身に付けることを目的とした F 科目を大幅に増設してまいりました。また段階的な履修の仕組みとして、これまでの中級レベル、上級レベルに加え、2022 年度より新たに導入レベルを新設して展開しております。

TGU の最終年度にあたる今年度の全カリシンポジウムは、履修者の英語力や授業評価アンケートの結果などを用いて、F 科目の効果を検証したいと考えております。また、導入・中級・上級の各レベルの授業運営に関する事例報告をいただき、意見交換を行って、F 科目の課題や今後の展望について考える機会にしたいと思っております。こうした思いから、今回のシンポジウムは「外国語による総合系科目（F 科目）の成果と課題」



筧 三郎 (司会)



浅妻 章如

というタイトルにしました。よろしく申し上げます。

**寛(司会)** どうもありがとうございました。それでは、これより本日のプログラムに進んでまいります。本日のプログラムですが、これまでの検証報告、続いてF科目の各レベルにおける事例報告を行った後に、ご参加の皆さまからご意見を賜って意見交換に進んでいくという次第です。まずは、検証報告について、全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダーで文学部教授後藤雅知先生にお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

## ■検証報告

### データから見るF科目の成果と課題

後藤 雅知（全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／文学部教授）

ただいまご紹介にあずかりました総合系科目構想・運営チームリーダーを務めております文学部の後藤です。

先ほど浅妻先生からお話がありましたが、F科目について少し説明したいと思います。もともとF科目は、国際センターが立教生と特別外国人学生向けに開講した英語による日本研究科目を起源としており、2001年度に計8科目でスタートしました。その運営が2015年度に国際センターから全学共通カリキュラム運営センターに移管され、さらに2019年度より外国語による科目を相当程度増やすことになり、現在のようにF科目導入、中級、上級というカテゴリに整理されました。開講した当初のF科目は、英語による日本研究科目に限定されていましたが、現在はその枠を超え、外国語による総合系科目は全てF科目としてくられています。つまり、当初のF科目という位置付けとは少し異なり、主に英語などの外国語で行われる全ての科目をF科目と言っております。それを踏まえながら、情報企画室で作成していただいたデータに基づいて検証報告をさせていただきます。情報企画室には、この場を借りて感謝申し上げます。



後藤 雅知

## 開講・履修状況

まず科目数ですが、F科目の増加数を示したデータを見ると、2021年度が70コマ、2022年度が105コマ、2023年度が118コマと、順調に科目数が増加しています。これをレベル別に見ると、立教生の英語力のメイン層（CEFR A2～B1レベル）を対象とする中級科目が大幅に増設されています（2021年度比33コマ増（12コマ→45コマ））。カテゴリ別に見ると、第2カテゴリの「社会への視点」がかなりの割合を占めていることが分かります（42コマ／全118コマ）。これはF科目に限ったことではなく、総合系科目は全体として第2カテゴリである社会科学系が多いため、こうした結果となっています。

次に、年度ごとの履修申請者数と実際の履修者数をまとめたデータを見ると、延べ履修者数は2021年度722名、2022年度1,961名、2023年度2,967名と増加しています。特に2022年度、2023年度と大幅に増加しているのは、この間の「F科目パンフレット」の制作等により、F科目の認知度が上がったことが理由として挙げられると考えています。レベル別に見ても、特に中級科目は履修者数が約6.5倍に増加しています（2021年度235名、2023年度1,516名）。また、導入科目は開講して2年目のため科目数は少ないのですが、履修申請者数が意外に多く、定員の都合上、抽選で落ちてしまっている場合が多いということが分かります（履修申請者数684名、履修者数421名）。

続いて開講科目数・履修申請者数推移について。科目をレベル別にまとめたデータを見てみましょう。導入科目は2022年度からの開始となるものの、全てのレベルにおいて、科目数よりも履修申請者数の増加率の方が高くなっていることが分かります。1科目あたりの平均履修申請者数は、上級科目がもともと5名程度でしたが、そこから倍ぐらいに増えています。上級科目は演習科目であり定員はそもそも少ないので比較的増えていると言えます。カテゴリ別に見ると、第2カテゴリ「社会への視点」、第3カテゴリ「芸術・文化への招待」の履修申請者数は大幅に増加しています。一方、第1カテゴリ「人間の探究」や第4カテゴリ「心身への着目」は科目数を増やしても、履修者数はあまり増えていないということが分かります。

学修期別履修レベルについて、導入期は想定通り導入科目を受ける学生が多いです。もともと導入期は導入科目、形成期は中級科目から上級科目、完成期は上級科目を学生は履修するとイメージしていました。しかしながら実際には、完成期の学生も主に中級科目を履修していることが分かります。

また継続履修状況についてですが、導入科目を履修した学生が、その後に履修した科目レベルの推移を表した「履修開始【導入】」のグラフを見ると、導入科目を履修した後に中級や上級の科目を履修する学生は、7%程度にとどまっています。このことから、導入と中級との間にはかなり高いハードルがあり、導入科目の履修後すぐに中級科目を履修するという流れになっていないことが分かります。ただ、このグラフは現1・2年

次生のデータしかありませんので、今後データを取っていくことで少し変わっていく可能性はあります。それから「履修開始【中級】」と「履修開始【上級】」のグラフを見ると、中級・上級科目を履修した学生の継続履修率は20%を超えています。ただ、中級科目から上級科目への継続率は低く、中級科目を受けたからといって、必ずしも上級科目への履修に進むというわけではないようです。実際、上級科目を履修した学生の半分以上は、その後、中級科目を履修していることが分かります。

続けて、留学前後の履修レベルを比較して見ると、留学前は中級科目を履修する学生が8割以上である一方で、留学から戻ってくると、今度は上級科目を履修する学生が4割強いることが分かります。このデータから、中級は留学前の学習環境を体験するための科目、上級は留学後のさらなるレベルアップのための科目として活用されていると思われる。

## 履修者の英語力

次は、実際に履修した学生の英語力について見ていきます。英語力の判定にあたっては、入学時の英語プレイスメントテストおよび英語力伸長度測定テストの成績をCEFRに換算しています。TOEIC L&Rで550～780点の学生がCEFRではB1レベル、785～940点ぐらいがB2レベルとなり、B1が中級、B2が上級というイメージで設定しています。

それを踏まえて、履修者のCEFR分布を見ると、【導入】のグラフでは、まさに狙い通り、中級に満たないA2相当の学生が約6割を占めています。【中級】のグラフは、基準のレベルであるB1の学生が約半数を占めながらも、レベルの高い学生、あるいはA2以下の学生も意外に多く、幅広いレベルの学生が履修しています。【上級】のグラフからは、基準に満たないB1以下の学生が半数以上を占めていることが分かります。つまり学生は、必ずしも英語のレベルによって科目を選択しているわけではなく、講義・演習といった授業の形式や内容によって履修しているのではないかと思われます。

履修前後のCEFR変化をF科目全体で見ると、A2・B1の割合が減少し、B2以上の割合が増加していることから、履修者の英語力は向上していると思われます。レベル別に見ていくと、【導入】については英語力の変化があまりみられません。ただし、このデータは、履修者の大部分を占める1年次生のその後のデータ取得が不十分なため、導入科目の傾向とはいえません。一方、【中級】については、履修前の時点でA2だった学生の約66%がB1以上に、B1だった学生も約27%がB2にレベルアップしています。【上級】については、履修前にA2だった学生の60%、B1だった学生の約45%がレベルアップし、さらに、履修前の時点でもレベルが高かったB2の学生も15%以上がレベルアップしています。

入学時のCEFRレベル別にF科目履修経験者と未経験者の最新CEFRを比較したデータを見ると、F科目を履修した学生の方がレベルアップ率は高くなっています。特に、

入学時のCEFRレベルがA2だった学生に注目して見ると、F科目の履修経験のない学生のレベルアップ率が約16%にとどまっているのに対し、F科目を履修した学生は半数以上がレベルアップしていて、その差は顕著です。もともとF科目の履修者は、英語の学習意欲が高く、F科目以外の言語系科目や留学なども経験している可能性があるものの、少なくともF科目の履修が、学生の英語力向上に一定の影響を与えているのではないかと考えられます。

## 授業評価アンケート結果

続いて、2021年度から2023年度の授業評価アンケートを集計したデータについてお話ししたいと思います。まず授業満足度ですが、F科目の平均値は4.43であり、それ以外の総合系科目の平均値3.53と比較すると非常に高く、満足度が極めて高いことが分かります。さらにF科目のレベル別で見ると、どのレベルも満足度のポイントは高く、特に上級科目については、「大いにそう思う」「そう思う」と答えた数値を足すとほぼ99%が満足したことが分かります。

授業を通して英語への抵抗感が軽減したかどうかについては、授業評価アンケートにおける総合系科目の独自設問による集計データで見えていきます。これを見ると、英語教材等を使用した科目への抵抗感を和らげるために設定した導入科目では、平均値が3.61と、あまり高くありません。中級・上級科目については、科目の設定基準よりも英語レベルが低い学生も履修していて、そうした学生は挑戦的にと言いますか、少し大変かなと思いつつ履修したのかもしれない。そういう学生にとっては、「抵抗感が和らいだ」と感じている人が多いようです。英語力が低い学生にとっても、実際に英語で講義を受け、「自分も英語が使用できるんだ」と自覚し、それが抵抗感の軽減につながっているのではないかと考えられます。

授業満足度と抵抗感軽減度は、中級科目と上級科目では相関がありますが、導入科目ではあまり相関が見られません。学生は導入科目を英語への抵抗感の軽減を目的として履修しているわけではないのかもしれませんが、結果として英語への抵抗感は、それほど下がらなかった、その一方で満足度は高かったという結果になっています。

## 結果から見られる課題

F科目の中でも導入科目の需要は結構多く、倍率が高くて抽選で落ちてしまう学生がたくさんいるという状況になっています。こうした学生の需要に鑑みて、導入科目については、より科目数を増やし、内容を充実させていく必要があると思います。導入科目は始まってからまだ今年で2年目。来年に向けて急速に増やすことは、実際にはできませんが、今後、増やしていく必要があるのではないかと考えています。

カテゴリの偏りについては、社会科学系の第2カテゴリの科目がかなり多く開講され

ているわけですが、最初に申し上げた通り、本学の総合系科目全体で見ても第2カテゴリが多い傾向にあるので、これは急には改善できません。学生の履修動向を見ると、第2カテゴリの中級科目が多く、多くの学生を集めています。したがって第2カテゴリのF科目が多いことは、大きな問題ではないのかもしれませんが。こうした点を考慮しながら、科目のラインナップを充実させていくことが必要だろうと思います。もともと「F科目をとにかく増やせ」という至上命題があったことから、科目内容を限定せず、かなり幅広い分野のF科目を増やしてきました。しかし、そもそもF科目の始まりが日本研究科目だった点を踏まえて、いずれは内容を見直すことも必要になるだろうと思います。

また、履修者数のさらなる増加に向けた方策の検討を行う必要があります。現状は、導入科目が定員80名のところ平均70名、上級科目も20名のところ13名で、定員の半分以上が埋まっている状況です。しかし中級科目は定員80名のところ平均34名です。せっかく講義系科目を開講しても、履修者が1人、2人になってしまう科目もあるので、履修者数を増やさなければなりません。例えば、学生が何度でも英語を聞き直せるように、中級科目はオンデマンドでの開講を推奨することも考えるべきかと思えます。また、継続履修率の向上に関しては、始まったばかりの導入科目について、今後も引き続きデータを取って注視していく必要があると思います。

最後に、導入科目の位置付けや授業運営方法・内容の検討について申し上げます。導入科目は学生に人気がありますが、まだ始まったばかりで、どういう科目を揃えたらいいのかが必ずしも明確ではありません。今年度春学期の授業を2つ見学させていただきましたが、英語のテキストを使いながら講義は完全に日本語という授業もある一方で、基本的に教員は英語しか使わない授業もありました。もちろんそこでは非常にやさしい英語を使い、学生が授業に十分ついていけるように配慮されていました。この後、田村先生からもご説明があると思いますが、例えば「立教大学の歴史」の授業では、歴史を人物史的に作り直した英語のテキストを使って、日本語で授業を行っています。このような内容は導入科目として適切なのではないかと思っています。「英語によるビジネスコミュニケーション入門」では、学生にある程度のグループ活動をさせていて、その活動では学生同士が日本語を使えるように授業運営されています。授業中、英語しか使えないわけではなく、グループ学習の中では日本語が使えて、教員とのやり取りや授業そのものは英語という授業運営です。今後、導入科目にはどのような内容や授業運営が向いているのかを検討し、導入科目の在り様を深めていければと思います。以上で私の話は終わります。ご清聴ありがとうございました。

**筧（司会）** 後藤先生どうもありがとうございました。ここからは、F科目の各レベルを担当された3名の先生方に、それぞれの授業で工夫なされた点、学生の様子、運営上の課題等についてお話しさせていただきたいと思います。

先ほど後藤先生からご紹介がありましたが、まずは導入科目の「立教大学の歴史」をご担当いただき、立教学院史資料センターで助教を務めていらっしゃる田村俊行先生か

らお話しさせていただきたいと思います。田村先生は、2020年度より総合系科目「立教の歴史」をご担当いただいております。今年度からは総合チームの依頼を受けて、新たにF科目導入として「立教大学の歴史」をご担当いただきました。田村先生よろしくお願いたします。

## ■事例報告

### 導入「立教大学の歴史」

田村 俊行（立教学院史資料センター助教）

ただいまご紹介にあずかりました田村俊行と申します。私はF科目導入レベルを担当いたしまして、木曜の1時限に「立教大学の歴史」という授業を行ってまいりました。先ほど眞先生にご説明いただいたように、もともとと同じタイトルの授業を日本語で担当していましたが、それを英語の授業に変えて実施しました。



田村 俊行

### 科目の概要と授業の進め方

科目の概要としては、立教大学の創業者および開拓者たちの実績を巡り、その実践と在り方を知ることを通して、異文化とグローバル環境についての理解を深める、という目的のもとに行いました。本学の創業者および開拓者たちは、チャニング・ムーア・ウィリアムズ（1829～1910）、ジョン・マキム（1852～1936）、アーサー・ロイド（1852～1911）、ヘンリー・セントジョージ・タッカー（1874～1959）、チャールズ・ライフスナイダー（1875～1958）、ポール・ラッシュ（1897～1979）の6名の宣教師です。

授業の進め方は、履修者全員で英文のテキストを講読するというものです。講読にあたっては、ペアワークを導入しました。ペアワークを行うにあたって、あらかじめ座席を指定します。授業のたびに異なるペアになるように座席に番号を振り、教室に入ってきた学生に番号札を配って席に着いてもらいました。こうしてペアを作ったあとに、まず個人ワークとして履修者が各自1パラグラフを読んでいきます。1パラグラフが大体100ワードくらいになっています。ざっと目を通して内容を掴んでもらうのに、大体3分～5分くらいの時間を取ります。それを終えてからペアワークに入ります。学生2人がペアになり、日本語でやり取りしながら互いに読解内容を突き合わせ、要点を確認してもらいます。細かい内容ではなく「このパラグラフは、要するにこういうことを言っているんだよね」ということを、しっかりと確認し合ってもらいます。ペアワークが済んだら、私がいずれかのペアを指名し、学生はパラグラフの要点を日本語で回答します。

回答内容に対して、誤読していた場合は「この部分はこうだったよね」と訂正しつつ、パラグラフの要点を解説します。こうして1パラグラフを終えると、次のパラグラフについて、個人ワークをおこなう。これを授業内で繰り返していきます。100分授業で、実際には8～10パラグラフの進捗となりました。

## 授業の工夫と授業資料

私の授業は導入科目でしたので、基本的に授業の進行は日本語で行うことにしました。あまりハードルを上げると難しいことになりますので、その代わりに、テキストはすべて英文にして、まずは「読む」ことに特化しようと考えたからです。歴史学の授業は講義形式が主流だと思いますが、それをそのままF科目の授業で行うと、私が英語を読み聞かせることになり、それでは学生にとってあまり意味がないのではないかと思いました。それよりも、英語の四つの技能のうちの「読む」に特化したほうが良いと考え、その結果、英語文献で学ぶということになったわけです。「読む」に特化することでどのような教育効果を期待したかという点、パラグラフ・リーディングでは、英文を精読して内容を正確に理解することを目指したのではなく、ざっと読んで要点をつかむことに注力してもらいました。こうすることで、英語でアクティブに学ぶ機会を確保できたと思います。

もう一つの工夫が、ペアワークを採り入れたことにあります。学生間の英語スキルに差があることで、授業参加への意欲や、追いついてこれるか否かにも差が出るのではないかと想定していました。そのため、ペアワークをすれば、こういうところが分かった、こういうところが分からなかったと、学生同士で気軽にフォローし合えるようになりますし、そうすることで、途中で脱落してしまうことの予防にもなるのではとの思いから、採用しました。加えて、回答者を指名しても「分かりませんでした」などという回答になってしまうのはとても残念なことなので、そうならないよう、回答前に学生同士で情報共有できれば、たとえ内容理解が不十分だったとしても積極的に発言できると思ったわけです。実際に、ペアワークを採り入れたメリットは大きかったと思っております。履修者の8割以上はしっかりと授業に出て、最終試験も無事クリアして行きました。

これも授業の工夫に含まれると思うので、授業で使った資料についても説明しておきます。授業で使った資料は英文テキストのみですが、これは私が作りました。

そもそも、これまで私が担当していた「立教大学の歴史」（日本語の授業）は、どちらかというと大学の制度史といった側面が強いものでした。それをそのまま英文で読んでも学生が十分に内容を理解できるかどうか、授業のペースにしっかり追いついてこれるかどうか、その点に少し不安を感じておりました。こうした理由から、制度史よりも、人物にフォーカスした伝記を扱うほうが良いのではないかと思い、伝記をベースにした授業を計画しました。ただ、先ほど紹介した6名の宣教師のうち、英文の伝記が残っているのはヘンリ・タッカーのみでしたので、結果的に自分で調べ、書きあげなければな

らないということになりました。人物にフォーカスしたのは、やはりパターン化しやすいという側面があったからです。出生、教育、宣教活動、立教での業績、それ以外の個人の業績、そして晩年はどうだったのか。このように人の一生を辿っていく内容であれば、学生にも理解しやすいのではないかとということで、人物の伝記として授業のテキストを作り上げていきました。なお、その際に参考にしたのは、*Oxford Dictionary of National Biography* という伝記事典です。

具体的な章構成の例としてアーサー・ロイドの部分を紹介します。八章は「アーサー・ロイドと日本」と題し、一節で「出生と聖職按手」について書き、二節で「英語教師としての活動をまとめました。九章の「訓令第 12 号問題」では、ロイドの対応について一節「キリスト教主義放棄の危機」と二節「アメリカ聖公会の反応と訓令の結果」で扱いました。十章では「言語学者ロイド」と題し、一節で「英語教育者、翻訳家、仏教研究者としての」側面に光をあて、二節はロイドのパートの締めくくりとして「晩年」の話をしています。アーサー・ロイドのパートは、全 22 パラグラフ、約 3000 ワードでした。

## 履修者の反応（ポジティブ／ネガティブ）

履修者の反応では、ポジティブな学生コメントとして、「全ての授業資料が英語というのは新鮮で楽しかった」「英語への抵抗感が少なくなったと感じた」「歴史を知ることができただけでなく、自分で調べる姿勢も身に付いた」「英語で学ぶことに抵抗は最初あったけれども、十分に時間が取られていたのでついていくことができた」とあり、英語テキスト「で」学ぶことの抵抗感を、授業を通して少し緩和できたのかなと思っています。ペアワークについてのコメントでは、「英語が苦手ですが、ペアの人といろいろ確認しながら進めることができたので、何とかうまくできました」（他にも同様の意見あり）という感想から、積極的に授業に参加できる状況が作れていたかと思えます。

一方、ネガティブな意見では、「英文の言い回しが難しかったり、専門用語が多かった気がする」（他にも同様の意見あり）というコメントがありました。私の英作文の水準的にそれほど難しい言い回しはできないと思いますが、そのような意見もありました。また、「日本語の補足的な説明がもっとないと、なかなか理解しにくいような専門用語もあった」なども。ほかには授業のペースについての意見もありました。これは学生によりけりなので何とも言えませんが、私としては、正直、ペースをもっと早めたかったという思いがあります。しかし、それはちょっとできなかったわけですが、学生からは「今ぐらいのペースがちょうどいい」というコメントもありました。また、「休んだ日の内容が、結果的によく分からないまま次に行ってしまうことがあった」という意見もありました。これらをまとめると、やはり英文の難易度に関しては、日本語での丁寧な解説が学生から求められているのだと思うのですが、そこにこれ以上時間を割くことは現実的ではありません。予備知識としてキリスト教の教派や日本史の教育制度についてどれだけ知っているかという点で、英文の理解度に差がついてしまったかと思えます。授

業のペースについて、リーディングの時間を増やすにしても、やはりこれ以上その時間を確保するのが難しいという問題があります。それと欠席者のフォローは、通常の日本語の授業であれば、テキストのここを読んでおくように、と指示して自習させることはできますが、英文テキストでは、ハードルが高いからなのか、なかなかそれができないという感じでした。その点で、通常の日本語の科目に比べて欠席者などのフォローは難しかったと思います。

## 実践を踏まえた所感・達成・課題

実践を踏まえた私の所感としては、テキストの講読形式で行ってきましたが、教員がかなりしっかりとした事前準備をすることで学生をサポートできるようにすることが必要であり、加えて、履修者相互でサポートしてもらおう体制が大事だと思いました。やはり、英語で学ぼうとする意欲ある学生が来るので、その意欲に継続性を持たせるためにも（また、途絶えたとしても再起できるように）、ペアワークなどでのアクティブな活動を取り入れることは、すごく重要だと思っています。

また、この授業では「読む」に特化させたわけですが、「次のステップ（中級以上）に果たしてつながるのかな」という疑問をずっと持ちながら授業を行っていました。ステップアップという意味では、四技能を駆使する中級以上との差はやはり大きいのかなと思います。中級科目へと「橋渡し」できることが理想だと思いますが、今の私の授業運営の状況で考えると、四技能を全部使って、しかもそれをやさしくしたとしても、そのさわりすらなかなか難しいと思っています。さらに、導入科目を担当する教員にも、中級・上級科目の先生方と同レベルか、それ以上の英語スキルが必要になってくるのではないかと考えています。とりわけ満足感やステップアップのためには必要になってくると感じました。やはり授業の中で、教員も学生も英語をたくさん使うことで得られる臨場感が、学生の満足感や次への意欲につながると思うので、その部分が重要なのかなと感じています。それをいろいろ考えていきますと、この導入科目でクリアすべき問題は、果たしてどこまでなのかということが、少し疑問に思っているところであります。

導入科目自体が2022年に始まったばかりですが、現状は、まだ次のステップへの「橋渡し」に至る前の段階だと考えています。今後としましては、「橋渡し」のための何らかの仕組みを考えていく必要があると思っております。私からはここまでとなります。

**筧(司会)** 田村先生、どうもありがとうございました。続きましてF科目中級の事例報告でご説明いただくのが、外国語教育研究センターの特任教授を務めていらっしゃる長谷川アリソン先生です。長谷川先生は、2022年度よりF科目中級を2科目ご担当いただいております。本日は、本年度の秋学期に履修者約80名で開講されている「Techniques for reading and enjoying a picturebook in English」、英語の絵本を読んでいくという興味深い授業の実践についてお話しいただけます。長谷川先生よろし

くお願いいたします。

## ■事例報告

# 中級「Techniques for reading and enjoying a picturebook in English」

長谷川 アリソン (外国語教育研究センター特任教授)

皆さんこんばんは。ご紹介にあずかりました長谷川と申します。2023年4月から外国語教育研究センターの特任教授として着任しました。以前は宮城教育大学に10年ほどおりました、今回のコンテンツは、その背景をご認識していただいた上で紹介させていただきます。

サブタイトルは「諦めない心が大切」。「If at first, you don't succeed, try, try again.」ということがキーワードになっています。今回のコンテンツは、まずコースの紹介 (Course outline & details)、それから学生の振り返りと私のフィードバック (Student Reflection & Feedback)、最後は結論 (Conclusion) でまとめていきたいと思っております。



長谷川 アリソン

## 授業の概要と詳細 (Course outline & details)

科目のタイトルは「Techniques for reading and enjoying a picturebook in English (英語の絵本を読んで楽しむためのテクニック)」です。皆さんが思い浮かべる本の読み聞かせより、少しインタラクティブな授業になります。この科目の目標は、「Students will observe, then plan and practice doing interactive picturebook read-alouds, aimed at developing not only children's listening and speaking skills but also creativity and critical thinking. (学生は、子どもたちのリスニング・スピーキングスキルだけでなく、創造性と批判的思考力を伸ばすことを目的とした、インタラクティブな絵本の読み聞かせを観察し、計画し、練習します)」としています。つまり、ただ絵本を読み聞かせるのではなく、相手の考える力を伸ばす方法を実践しています。私はもともと小学校の教員でしたので、自分でも本の読み聞かせをしていました。読み上げるだけのものから、だんだんと読み手と聞き手のやり取りがあるような方法に変化していきましたが、そういったテクニックを授業で指導しています。

『Compelling Stories for English Language Learners—Creativity, Interculturality and Critical Literacy』の著者であるジャニス・ブランドによると、

文学を教えることは伝達ではなく、やり取り（交流）する、高度なコミュニケーション行動と見なされています。先ほど田村先生がおっしゃっていたペアワークのように、話し合いながら意味を深めていくやり方が、現在では一般的です。また、授業で扱う絵本は、皆さんがイメージしている絵本よりも内容がとても深いものです。読んでいくと意味は大体分かりますが、何を伝えたかったのかという深い意味を読み取るには、やはり、やり取りが必要なものがたくさんあります。履修者の反応をみると、「自分が読んで、その深い意味が分からなかったけれど、授業でみんなと一緒に考えたら、やっと意味が分かってきた」というコメントが結構ありました。

この授業はかなりプラクティカルで、私はセミナータイプと紹介しています。昨年度の履修者は30名でしたが、今年度は80名となり、セミナータイプの授業を行うのに少し苦労しています。

授業の準備（予習）としては、3点あります。一つ目が、テキストの所定の章を読むことです。授業ではその内容について話すというよりも、Google Classroomで、私が章ごとにポイントをピックアップして質問し、それに学生が答えるというQ & A形式で行います。そのやり取りの中でも少し交流があります。二つ目が、本の読み聞かせを授業で2回行うための準備です。三つ目が、最終レポートの作成です。

成績評価の対象は、授業への参加（20%）で、ほとんどがオンラインでのやり取りです。ほかに、本の読み聞かせの1回目（20%）と2回目（20%）、最終レポート（40%）となっています。

次に、履修者の背景を見てみましょう。2022年度の学生アンケートの設問「この授業に参加する前に知っていた絵本の数」では、約68%の学生が10冊～50冊の絵本を知っていました。このことから、もともと絵本が好きな学生が集まっている授業といえます。また今回新たに「この科目を選択する理由」について調査したところ、①科目内容（絵本）への興味（35%）、②英語力向上（28%）、③英語で行う授業への興味（14%）、④科目内容（絵本）への興味+英語力向上（19%）、⑤人との交流（4%）という5項目が履修した理由であることが分かりました。

授業は14週かけて行っていきます。最初の方はレクチャー的な要素がありつつ、私がいくつかの本を読み聞かせた後で学生に質問したり、グループで話し合ったりなど、効果的な読み聞かせのためのフレームワークの構築を実践していきます。

第6週からは、二つのグループに分けて、学生が実際に読み聞かせを行います。各グループの1回目の読み聞かせが終わった後に振り返りや反省を行い、それを踏まえた上で2回目の読み聞かせを行います。そして最後にもう一度、2回目の読み聞かせについて振り返ります。

2回目の読み聞かせに入る際には、「学生に少し難しいことに挑戦しているけれども、それが学びのチャンスだね（A challenge is a learning opportunity）」という呼びかけをしています。それは、もともとこの授業を組み立てる際に、「growth mindset」を意識しているからです。やはり、どんなことでもチャレンジしてみることが大切です。

1 回目に 100%できなくても、やったことに対してはステップアップできます。しかし、やらなければステップアップもできず、前に進むこともできない、と私自身が考えているからです。難しいことに挑戦して失敗しても、学んでいる実感を得られることは、私たちの日ごろのパフォーマンスにとっても大切だと思います。

こうした考えから、「Plan-Do-Review」というサイクルで 1 回目の読み聞かせを実施していきます。失敗してもまだ 1 回あるので、「1 回目よりは 2 回目のほうがうまくいく (A mistake as an opportunity to do it better next time.)」という呼びかけをしています。実は 1 回目でもすごく上手な学生もいます。完璧にできる学生もたくさんいますが、「思っていたより難しかった」というコメントも多く聞きます。

「Plan」では、読み聞かせ前の「Introduction Stage」をはじめ、本の表紙だけを見せる「Pre-Reading Stage」、本を読みながらの「During-Reading Stage」、読み聞かせの後の「Post Reading Stage」の各段階で、読み聞かせを行う学生がたくさんの質問や問いかけなどを行い、伝える内容が深まり相手の考える力を伸ばせるように準備します。

そして、実際に読み聞かせを行った後、「Review」となる振り返りを行います。その際、選んだ絵本は読み聞かせにふさわしかったかどうか、また読み聞かせのやり方で良かった点、あとは次回の改善点を考えてもらいます。昨年は少人数といっても 30 人でしたが、Google Classroom を活用してフィードバックする場面があり、とても効果的でした。振り返りのコメントには、「時間がちょっと余った」「質問したけれども、自分が話した部分が多く、あまり返答がなかった」などがありました。

2 回目の読み聞かせは、少し高度な挑戦をしてもらうために、「Plan-Do-Review」から「Plan-Do-Check- Review」のサイクルに変わります。この「Check」とは、実際に読み聞かせをしている相手の様子を注視することです。例えば、質問に対してどのような答えが返ってきたのか、読み聞かせが終わった後に絵を描いてもらった場合、どんな絵をどのように描いたのか、こういった点に注目してもらいます。自分のことだけでなく、相手の反応を見るという要素を取り入れています。2 回目の振り返りを聞くと、1 回目のフィードバックによって 2 回目は良くなった、というコメントが多いです。

2 回目の「Plan」も少し複雑になりますが、1 回目からステップアップしています。1 回目と 2 回目の読み聞かせで用意された質問数を比較した表を見ると、1 回目よりも 2 回目の方が、質問数が多くなったことがよく分かります。しかしながら、中には数が減っている人もいます。これは、簡単な質問をたくさんするより、もっと深い内容の質問に減らしている場合もあるので、質問数の多さだけでは一概に判断できないといえます。「Review」として行った振り返りでは、1 回目と 2 回目を比較し、今後に向けた前向きな改善点などが挙げられていました。

## 学生の振り返りと私のフィードバック (Student Reflection & Feedback)

学生にいろいろとアンケートを取ったところ、この授業に対しては、先生中心の受け身の授業ではなく、「Learner centered（学生中心）」だと感じている学生が結構多いことが分かりました。また、最も参考になった活動について、あらかじめ設定した項目から三つ選んでもらったところ、一番多かったのが、「実際にやってみることで伸びた」という項目でした。興味深いのは、上手な人のやり方を見たからとか、他の学生の読み聞かせから学んだとかではなく、実際に自分がやってみることで成長を感じている点です。

ほかにも、授業を始めたころに、絵本の読み聞かせが上手にできるかと聞くと、ほとんどの学生はできると思っていました。しかし、やったことのないことをするのは学びのチャンスという「growth mindset」をもつことで、学生の100%が「絵本の読み聞かせを2回繰り返すことに効果があった」と感じていることが分かりました。それに関する学生のコメントを見ると、「1回目より上手にできた」「改善点に注目して良くなっていった」などの意見が見られます。

さらに、どのぐらい上達したのかを聞くと、結構良い結果が出ています。その理由については、「2回目はリラックスして、自分でも本の読み聞かせを楽しんだぐらいに上手にできた」など。中でも一番面白い意見だと思ったのが、「他の学生からも学べたけれども、自分の体験から学べた」というコメントです。また、読み聞かせに対する今後について聞いたところ、「これからも伸びていける」「練習すればもっともっと上手になれる」という結果となり、絵本の魅力も学生にしっかり伝わっていると思います。

## 結論 (Conclusion)

授業の効果的な方法としては、やはり Google Classroom の活用が挙げられます。連絡をはじめ資料や提出物のやり取りを、全て一カ所で行えたことは良かったと思っています。また、「Plan-Do-Review」のサイクルを、2回目で「Plan-Do-Check-Review」に変更し、少しずつハードルを上げていった点も効果的だったと感じています。それから、私と学生の間で互いにフィードバックができた点や、私からのアンケート等で学生の意見をよく聞けた点も大変良かったです。

今回のシンポジウムを機に、今年の11月に学生に二つほど質問してみました。今は授業のおよそ半分を終え、7週を超えたあたりですが、現在の授業の理解度について5段階評価で聞いてみたところ、「理解している」の4,5の評価を選択した学生の合計は86.3%という結果が出ています。理解しているだけではなく、楽しんでいるかどうか5段階評価で尋ねたところ、「楽しんでいる」の4,5の評価を選択した学生の合計は86.1%という結果でした。読み聞かせは自分や他の学生も行っているの、いろいろ

な絵本に触れることができています。

では、英語の授業についてはどうでしょうか。授業は全て英語で行い、Google Classroom も全て英語で行っています。それについて学生のコメントを見ると、「最初は英語力が十分ではなかったのですが、このクラスに参加するのはとても緊張しましたが、今ではこのクラスを楽しむことができています」といった前向きなコメントをいただいています。やっていることが結構難しいので、最初のサイクルよりは2回目のサイクルの方が、みんな満足していると思います。また、授業のやり方、課題や Google Classroom に関するコメントについては、65人中13のコメントがあります。課題の説明や学生が理解しているかどうかの確認ということで活用しており、口頭で伝えたことは必ず Google Classroom でも確認できるようにしています。そのため、「Google Classroom が難しい」「Google Classroom が少し使いにくい」というコメントは1人だけでした。コメントのほとんどは、「メールや確認が多い」「宿題が少し多い」などです。

そのほか、要望として、「クラスメンバーとのアクティビティを増やしてほしい」や「絵本の読み聞かせの楽しさをより多く人と経験したいので、新しいメンバーとの交流ができるようにしてほしい」というコメントがありましたので、現在はそのように行っています。またポジティブなコメントについては、「友達ができた」「この授業が楽しい」など、率直な思いが伝わる内容となっています。

改善点としては、大きな教室のため椅子や机が動かせず、グループワークが少しやりにくい点です。あとは、先ほども申しましたが、現在の履修者が80名のため、人数的に昨年と違うところがかなり多く、対応に追われています。ほかには、Google Classroom を見た上で準備をした状態で授業に臨む学生もいれば、ほとんど見ないで準備もせずに来る学生もいるので、その点で少し差があります。また、「本当に来週は絵本の読み聞かせをするの?」「そうなんだよ」という会話を繰り返した学生もいます。

学生には理解の早い者や遅い者もいるようですが、1回目で何かあったとしても、2回目でそれはないので、皆さんもこのようなやり方をしてはいかがでしょうか、という提案をさせていただいて、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

**寛(司会)** 長谷川先生、どうもありがとうございました。続きましてはF科目上級をご担当されている今井祥子先生にお話しいただけます。今井先生は、全学共通カリキュラム運営センター兼任講師として、2021年度よりF科目上級の「Food Cultures and the Acceptance of Japanese Food in the World : Critical Thinking on Food」を担当されています。なお今井先生がご担当いただいている科目は、例年日本人学生と留学生のどちらからも人気が大変高い科目となっています。それでは今井先生、よろしく願いいたします。

## ■事例報告

## 上級「Food Cultures and the Acceptance of Japanese Food in the World」

今井 祥子（全学共通カリキュラム運営センター兼任講師）

ただいまご紹介にあずかりました兼任講師の今井祥子と申します。本日はこのような機会をいただきまして誠にありがとうございます。まず、本日は、簡単な自己紹介のあと、授業内容の紹介に入り、最後に今後の展望と課題をお話しさせていただきます。

簡単な自己紹介となりますが、立教大学では兼任講師としてお世話になっておりますが、普段は東京農工大学の農学部、これは厚木にあるキャンパスですが、そちらで勤務しております。アメリカ地域研究、食文化研究、文化地理学という三つの柱を立てて、テーマとしては、アメリカ合衆国を中心とした世界における日本食の受容について研究しております。こういった内容の授業を英語で展開してほしい、ということでお声がけいただきました。



今井 祥子

### 授業内容の紹介

続いて授業内容の紹介に入っていきたいと思います。上級クラスは、いわゆるTOEICの点数が700点相当以上の英語力をもっている学生で、実際、先ほども説明がありましたとおり、留学の準備や留学後の学生、それからイングリッシュトラックの学生、そして特別外国人学生が主たる対象となっています。演習形式ということで定員が最大20名となっておりますが、確か初年度の2021年は定員が15名となっていたところから増加し、加えて特別外国人学生、さらに今年度より特別外国人学生の定員も20名になったと理解しております。

科目の概要になりますが、タイトルは「Food Culture and the Acceptance of Japanese Food in the World : Critical Thinking on Food」です。「世界の食文化と日本食の受容について批判的に考える」ということを掲げております。実は、タイトルを決めるにあたって、もともと私からは「アメリカ合衆国における多様な食文化」というテーマで話をしたいと提案していました。しかし、それではテーマが狭過ぎて学生が集まらないのではないかと、とのご心配をいただき、現在のテーマに落ち着いたという経緯があります。内容については、まず、毎週授業までにリーディング課題を課しております。分量としては数ページの簡単なものから、1本の論文（本の1章分ぐらいのもの

の) を読んできてもらいます。それをもとに、なるべく短い講義をするように心がけ、授業中はディスカッションを重視して時間を長くとるようにしています。毎週グループで 30 分程度の時間を設けています。また今年度は、幸運にも、国立科学博物館で授業に関連したテーマの特別展が開催されていることもあり、フィールドワークも企画中です。明日が実施予定ですので、私も楽しみにしているところです。

シラバスに関して今日は詳しい話をする時間はないかと思いますが、大体の流れとしては、初回で食文化研究の方法論やアプローチ、それから概要を学び、その後は、世界、といっても限られるのですが、4~5カ国の食文化を学び、その国における日本食の受容について考えるという流れになっています。授業で扱う素材としましては、学術論文だけでなく、料理本や映画などを取り入れています。本当は食文化なので、試食や調理実習などもできたら楽しいと思うのですが、それもなかなか現実的に難しいところがありますので、代わりにレシピや料理本の紹介を意図的に行うようにしています。このシラバスでの最大のポイントは、最後に 15 分程度、学生によるグループプレゼンテーションを設けていることであり、演習要素の高い授業設計を目指しています。

続いて評価方法については、授業参加とリアクションペーパーを重視しており、こちらが全体の 40% を占めています。それから、最後のプレゼンテーションが 30%。これについては、2021 年度は個人で行っていただくプレゼンテーションでしたが、履修者数と時間の関係から 2022 年度からはグループプレゼンテーションに変更しています。さらにレポートが 30% ということになります。レポートは個人でテーマを設定していただきますが、授業を通じて学んだことや、食という日々の実践ができる科目であることから、授業を通じて自身の食生活についての意識がどのように変化したかななどをレポートに盛り込んでもらうようにしています。

次に、履修者の英語レベルと内訳の話に移りたいと思います。学期の初めに、履修者全員にアンケートを実施し、彼らのバックグラウンドとして、出身国、留学経験、海外での生活や教育内容、専門分野に関することを伺っています。そこから見えてくるのは、やはり日本人の学生といっても帰国子女の学生が多いということ。正規留学生は、特にアジア諸国からの学生が多く、韓国や中国の学生は毎年何人かいらっしゃるという状況です。それから、留学準備中の学生や留学から帰ってきたばかりの学生も結構います。さらに GLAP の学生も毎年数名はいます。特別外国人学生については、そもそもこの授業が 3 年目で、年度によって人数がかなり変化しています。そのことをまとめたデータを見ると初年度である 2021 年度は、全体数として定員が 15 名だったうえ、コロナ禍であったこともあり、日本人の学生が 14 名、正規留学生が 1 名、特別外国人学生は 0 名でした。それが 2022 年度になると、定員がまず 20 名になったことに加えて、特別外国人学生が 24 名と大幅に増加し、合計 44 名になりました。それに伴い、シラバスを変更しない程度に運営方法をいろいろと変えなければいけません。今年度は、理由は不明ですが(私の力不足も大いにあったのだと思いますが)、特別外国人学生が 5 名に減少し、合計 25 名になっています。今年度の特筆すべきことは、理系の日本人

学生が3名履修しており、大変良い刺激になっていると感じています。

さらに特別外国人学生の内訳を見ると、2021年度はコロナの影響もあったかと思いますが0名でした。しかし、2022年度は24名の学生がおり、その出身の内訳をグラフで示したのを見ると、アメリカが8名、オーストラリアが3名、イギリスが2名と、特別外国人学生の中でも英語ネイティブの学生が半分以上いたこととなります。さらに、オランダ、ドイツ、フィンランドの学生もいて、ほぼネイティブレベルの学生ということもあって、授業の雰囲気として「ここは日本なのか」と感じるような状態でした。2023年度は、留学生の数がそもそも5名と少なくなっているのですが、やはり英語が大変よくできる学生ばかりで、アメリカからの学生も1名いるという状況です。

授業の進め方や工夫についてのお話に入りたいと思います。開講してからの3年間、毎年スタイルが変化しているので、年度ごとに整理してみました。

初年度の2021年度はZoomを使ったオンライン授業を行い、リーディングのリアクションペーパーやディスカッション等は全てオンライン上で行っていました。学生が自分でリアクションペーパーを書くだけでなく、それを学生同士で見られるようにして、毎週クラスメイトの誰か一人に対して、必ずコメントを書くことをお願いしていました。これが結構大変だったと思うのですが、オンライン授業ながら大変良いインタラクションができたのではないかと考えています。学生同士だけではなく、私の方からコメントすることもありました。

2022年度は、コロナの状況も改善したことから授業は対面に戻りましたが、まだ学生間のコミュニケーションがやや心配な時期でもあったので、リーディングのリアクションペーパーとコメントは、2021年度のやり方をそのまま踏襲してオンライン上で行ってました。しかしながらプレゼンテーションについては変更しました。初年度では、学生一人一人にオンラインでプレゼンテーションをしていただき、学生の皆さんがZoomを駆使して画面共有し、ほとんど間違いもなくできて、本当に素晴らしかったです。2022年度は、授業が対面に戻ったということと、外国人の履修者が増えたことから、グループプレゼンテーションに切り替えました。年度が終わった際の授業評価アンケートの意見等や、2023年度の開講にあたって環境の改善があったため、さらに内容を少し見直しました。

2023年度も対面授業ですが、リアクションペーパーをオンライン上で書かせることは最小限にとどめました。とにかく授業内のディスカッションの時間を増加させることを意識的に行っています。また今年度もプレゼンテーションはグループで行ってもらうことにしました。今のところ、最後のレポートやプレゼンテーションがどうなるかわかりませんが、正直なところ、毎週リアクションペーパーを書かなくてもよくなったということで、学生全員が必ずリーディングを読んでから授業に参加しているかが不透明になった、ということもありますので、学期末の結果がどうなるか、興味をもって見るところです。

## 履修者の様子

履修者の様子については、どのF科目の授業でもそうかと思いますが、日本人の履修者には英語力のばらつきが見られます。特に帰国子女の学生であるか、留学前後なのかによっても違っていると思います。そういったことが、受講姿勢や授業中の反応、それから学生間の交流、あるいは自分自身が授業を通じて変わるか、ということについても影響を与えているように思われます。結果として、プレゼンテーションのパフォーマンスや成績にも差が出ているように感じます。

一方で、留学生との交流の様子や効果についてお話しします。グループプレゼンテーション等を通じた交流でいえば、ある程度の強制力をもたせた上でグループディスカッションやプレゼンテーションをしてもらうと、交流への意気込みは非常に感じられました。結果として、友達ができたということもあったと思われます。しかしながら、2022年度をみると、当初の予想通り、日本人は日本人同士で集まる傾向にありました。さらに留学生がたくさんいたので分かったことなのですが、留学生の中でも同じ国同士、あるいはエスニシティや英語が同じということで集まる現象が観察されました。これは授業内の特有の現象なのかは分かりませんでした。

続きまして、授業アンケートの内容を見ると、授業が対面になったけれども、リアクションペーパーを引き続きオンラインで書かなければならないことが反復的で、疲れるという意見がありました。もっと実践的な試食や調理実習などを行いたかったという反省もありました。さらに、同時にグループ作業をしてもらう中で、やはり参加しない学生も出てきたことが見て取れました。私からの所見としては、学期の最後に書いていただいたレポートの内容を見ると、学習や交流意欲への差がみられ、どのような相関関係があるのかは感覚的にしか分かりませんが、語学力があるなしにかかわらず、意欲のある学生が自主的によく勉強し、結局のところ、そうでない学生との成績面での差が見られたと感じております。

## 今後の展望と課題

今後の展望と課題といいますが、これは私からのご相談ということになるのですが、一つ目は、運営上の難しさです。学生が何を求めているかに日本人学生と留学生で違いがあると気が付きました。日本人の学生は、これから海外に出て行かれる方が多いので、海外のことを知りたいと思っているようでしたが、日本にいる留学生の多くは、日本食のことを知りたいと言っていた学生が多かったのです。やはり、どのようにバランスをとるかについて、履修者が判明し授業が始まってから考えなくてはならなかったことが、少し大変だったかなと思います。留学生の履修人数やバックグラウンドが、求めているものの違いに大きく影響していると思うので、履修者が判明してから慌てて対応しなくてはならないということも、少なくともありませんでした。二つ目として、留学生も

バックグラウンドがさまざまなため、食というテーマは取り組みやすいものではあるものの、方向論として深めていくには少し困難なことを感じました。三つ目は、ビーガンやベジタリアンの問題など、倫理面で少し慎重にならなくてはいけないテーマ等も授業では扱っているのですが、この点に関しては、お互いの文化、分野、バックグラウンドの違いを超えて議論できたと思います。しかしながら、やはり表面的な意見や当たり障りのない発表となってしまう傾向があるのではと感じております。

最後は、クラス規模やサポート体制についてです。演習形式の授業であれば、多くとも30名以下、できれば20名くらいがベストかなと思います。今後、調理実習やワールドワークなどをもっと盛り込めるようになっていけるのであれば、学生のTA（ティーチングアシスト）といったサポート体制は大変ありがたいなと感じております。長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

**筧（司会）** 今井先生、どうもありがとうございました。

## 意見交換

**筧（司会）** ここからは、これまでご講演いただいたことを踏まえて意見交換に移りたいと思います。まず、私からいくつか質問をさせていただきます。本日、いろいろなご報告を受けて、特に昨年度からスタートした導入科目については、継続履修率の向上や授業での英語の使用比率など、検討課題は数多くあるように感じました。まず、田村先生に導入科目から中級科目への接続について、どのようにお考えか、ご意見をいただけますでしょうか。

**田村** 歴史の講義ということもあるかもしれませんが、私が実践して学生の反応などから感じたことは、導入科目で英語の四技能を積極的に駆使して伸ばし、学生を中級科目につなげていくというのは、なかなか難しいのではないかと、この思いがあります。やはり、教員側にも相当のスキルが要請されるようになってしまいます。よって、中級レベルに上がることを達成目標のように求められるとなかなか苦しい面があるのでは、というのが実際に授業を行っている私の率直な感想です。逆に、全力リ運営センター側としては、どのような形を考えていらっしゃるのかをお聞きしたいと思っていました。

**筧（司会）** どうもありがとうございました。今の質問に関係するのですが、続いて後藤先生に導入科目の位置付けや科目としての目標について、お考えをお聞かせいただけますでしょうか。

**後藤** 導入科目は、英語への抵抗感を軽減することを目標にして新設したものです。実際に履修している学生はA2レベルです。つまり中級レベルの授業に出るには少し厳し

いけれども、英語を使った授業を受けたいという学生が、履修していることがデータから分かります。もともとそのような学生が履修してくれることを想定していたので、その通りになっているということです。アンケート結果を見ると、英語への抵抗感はそれほど軽減したわけではないので、田村先生がおっしゃるように、導入科目だけで英語への抵抗感を下げ、中級レベルにつなげていくように設定することは困難であると、今回のデータ分析から読み取れると思います。ただ、満足度が高いことは間違いなく、それはどの導入科目についても先生方のさまざまな工夫がなされているからだと思います。

また「立教大学の歴史」と「英語によるビジネスコミュニケーション入門」など、春学期に見学させていただいた講義については、日本語でのグループワークやペアワークが導入されていて、学生は英語での授業に対する抵抗感はそれほど高くなく履修できているのかなと思いました。導入科目は、先生方が授業運営をいろいろと工夫されていて、またそのことをご報告いただいているので、今後もそうした情報などを共有していければと思っています。導入科目の履修から中級科目の履修につなげていくことは、すぐには達成できないものだと思っています。

**筧（司会）** どうもありがとうございます。後藤先生からご説明いただいたように、やはり導入科目から中級科目の間には大きな壁があるようで、F科目の中だけでステップアップしていくことはなかなか難しいというお話でした。導入科目と中級科目の間として、言語系科目をうまく利用できると良いのかもしれません。長谷川先生からもご意見をいただけますでしょうか。

**長谷川** 私は中級科目を担当していますが、この壁が少しでも透明になるように、中級科目の中でも、やややさしいもの、やや難しいものなどとランキングを付け、あらかじめ示しておく方法があるのではと思います。学生や教師もランキングをイメージして授業に臨めると考えます。

**筧（司会）** ありがとうございます。今の意見について、運営側として後藤先生からご意見をいただけますでしょうか。

**後藤** 先ほど筧先生もおっしゃったように、学生の英語力を上げていくには、F科目導入だけではなく、現在、改革が進められている言語系科目の在り様や、次のステップに向けてのF科目の科目構成なども含めて、全学共通科目全体として考えていかなければならないと思います。また中級科目についても、学生同士がやり取りするグループワークがある講義なのか、ハイレベルな英語で一方向的に展開する講義なのかなど、授業方法によって、学生が受けやすい科目か否かという違いはあると思います。

そもそもF科目が急速に増えたのは、ここ2、3年のことなので、各科目でどのような授業展開をしているのかを、総合チームリーダーとしてはあまり分かっていないとい

うこともあります。シラバスに明記され、いろいろ把握できるようになれば、学生も「この授業なら取れそうだ」と選びやすくなるだろうと、今、お話を伺いながら思いました。

**筧 (司会)** ありがとうございます。続きまして、先ほど先生方からご報告いただいた中で、TAなどの効果的な授業運営のためのサポート体制や、80名は多いといった適切な授業規模などについてご意見をいただいております。重要だと思いますので、改めて3人の先生方にご意見をいただければと思います。それでは、田村先生からお願いします。

**田村** クラス規模でいえば、今回の履修者は40名で、実際に来ない学生もおりますので、大体その8割ぐらいの規模となります。その人数で回答者を順々に指名していくと、2回目の授業で一旦全員に回答が回るような感じで進めていけました。そうした点では、アクティブな活動を維持することができたかなと思いますが、人数がこれ以上多くなってしまうと、やり方を変えるなど、考えなければいけないところも増えてくる気がしました。サポート体制としては、TAが付くにしても、日本人の学生よりもネイティブの学生もしくは院生などに協力していただければ、より良い別のやり方もあるかもしれません。ただ、かなり綿密に相談しながら授業を作っていくことになるので、それはそれでTAの負担もかなり大きくなるのではと思います。私からは以上です。

**筧 (司会)** ありがとうございます。それでは長谷川先生、お願いできますでしょうか。

**長谷川** 現在80名で授業を行っています、やはり、途中から来なくなる学生も何人かはいます。しかしながら履修者名簿には名前があるので、グループワークを行うときに、その学生はいなくても、なかなか名簿から除くことはできません。というのも、その学生が何週間後に突然出席したときに、グループワークの居場所がないのはかわいそうだと思うからです。私としては、学生がいつでも戻ってこられるように準備はしておきますが、そのために、1グループ8人のところ3人しかいないなどの状態がおきてしまいます。このように突然消えていく学生の対応も考えなければいけません。それからTAも考えてはいましたが、TAにかなりいろいろなことを説明しなければならぬと思うと、自分でやったほうが早いかなと思ってしまいます。また、私の授業は独特なやり方なので、自分でやったほうが早いと個人的に判断しました。

**筧 (司会)** ありがとうございます。それでは、先ほどの講演で、今井先生からは人数についてのご意見をいただいておりますが、改めてご意見をお聞かせいただけますでしょうか。

**今井** 先ほどの話では履修者は30名ぐらいまで、できれば20名というようにお伝え



してしまいましたが、かなり理想論で発言していることは承知しています。今、グループで行っているディスカッションは、本当はクラス全体でやりたいと思っています。

以前、日本人の学生に履修動機を聞いたところ、留学生の皆さんと積極的に交流したいと思って授業を取ってくださったようです。では実際に、交流をどの程度できているかということ、授業を見る限りでは、かなりサポートしてあげないと、その一歩が踏み出せていないと思います。そのため、ディスカッションをクラス全体に展開した場合、20名～30名になると、ほぼ発言するのがネイティブあるいはネイティブ同等の英語ができる学生になってしまいます。その点については、クラスの人数を少なくすればいいのか、あるいは、もっと授業運営を工夫していったらいいのか。このようなことを日々悩みながらやっているのが現状です。

また、TAに関しては、先ほどの田村先生のご意見が本当に素晴らしいと思いました。確かに、日本人の学生なのか、それ以外の学生なのかで、関わっていただく方法が多様になると思います。もちろんクラス人数が少なければ、それほどサポート体制として必要はないかと思いますが、長谷川先生のクラスのように、本当ならば30名ぐらいで行いたい授業が80名になってしまった場合には、サポート人数をすぐに増やしていただけるような体制があれば、教員としてはとても心強くと感じました。

**寛(司会)** 貴重なご意見をありがとうございました。

## 質疑応答

**筧（司会）** それでは、まずオンラインでご参加いただいている方からのご質問を読み上げさせていただきます。まずは後藤先生に、「詳しい分析の結果をありがとうございます。F科目の中でも、特に中級・上級は特別外国人学生の履修が多いかと思いますが、本日のご報告の履修者数の外にあると考えてよろしいでしょうか」という質問です。これは、外という認識でよろしいのでしょうか。

**後藤** 特別外国人学生については、数字に入っていません。

**筧（司会）** どうもありがとうございます。先ほどの質問の続きですが、「その特別外国人学生の履修状況や授業と、特にその授業を通じての立教生との関わり合いについて、何かお気づきの点があればお伺いしたい」ということです。中級科目・上級科目の担当者である長谷川先生と今井先生に、特別外国人学生と立教生との関わりについてお教えいただけますでしょうか。

**長谷川** 今年度の「Techniques for reading and enjoying a picturebook in English」の履修者のうち、特別外国人学生は3名ほどです。グループを作るときはあまり意識していません。アルファベット順に名簿を作り、機械的にグループを分けたところ、いい具合に特別外国人学生がパラパラと入るような形にできました。意識しはじめたらきりが無いと思って、機械的に振り分けました。この前も同じように再度振り分けましたが、機械的に行ったらいい感じに分かれました。授業では、楽しそうにお互い支援しながら、交流している様子が多く見られます。絵本なので、読み聞かせでは難しい英語を使っていないものの、その後の討論では結構難しい会話になりますが、それぞれ自分のレベルで話しています。特別外国人学生も楽しんでいるようなので、今のところは問題ありません。学び合うという視点で参加してくれていると思います。

**筧（司会）** どうもありがとうございます。それでは今井先生、教えてくださいませんか。

**今井** 先ほどの話と重複しない点でお話しさせていただきますと、私もグループ分けをするときは、ネイティブの学生と日本の学生さんの間で線引きはしていません。特に私の授業を受けている日本人の学生は、英語ができる学生が多いので、それほど必要性を感じていないということもあります。ただ自由にグループを組ませると、やはり日本人同士、ネイティブの学生同士が集まってしまうことはあります。そのため、グループ分けをするときはくじを引いてもらうようにしています。うまくいくこともあれば、うまくいかないこともあります。ファイナルプレゼンテーションに関しては、発表したいト

ピックをまず挙げてもらってから、私の方でグループ分けをするようにしていますが、一つのグループが日本人の学生だけになってしまい、話し合いをしてもらうときに、最近ちょっと日本語が聞こえるようになってきました。これは良くないなと思っていて、今どうしようかなと悩んでいるところです。その学生たちは、普段から英語がよくできるのですが、やはり日本人同士ということもあるのでしょうか。そのあたりが語学の授業ではないので難しいなと思っているところです。

**寛(司会)** どうもありがとうございました。それでは会場にいらっしゃる皆さまもご質問・ご意見等がありましたら、ぜひお願いしたいと思います。特に本日は、F科目をご担当の先生方もご参加いただいておりますので、運営する中での悩みや工夫点などございましたら、ぜひ共有いただければと思っております。

**質問者①** 本日はご発表ありがとうございました。大変勉強になりました。前から指摘されていることだと思うのですが、学生からみた場合、F科目が言語系の自由科目と区別がつかない。言語系科目でも非常にラインナップを増やしていますし、CLIL科目なども充実してきていると思います。一方でF科目は、総合系科目の中に置かれていることから考えれば、本来はその内容への理解、あるいはそれを通して知識を得て、洞察力を高めていくことが求められていると思うのですが、その点について先生方はどのように意識されているのか、特に評価において、英語力がどのぐらいの比重、つまり英語力の高い学生が結局は良い成績をもらえるということにならないかということ、非常に気にしているところです。それが質問の1点目です。

2点目は、質問というよりは意見ですけれども、これも前からの課題ですが、英語以外の言語によるF科目の開設に取り組んでいく必要があるのかなと。英語に偏重しないグローバル化ということを考えていけば、そういう科目を立教大学として置いていくことが必要なのではないかと思えます。そのあたりについて、これは後藤先生への質問になるかもしれませんが、お考えをお聞かせいただければと思えます。

**後藤** 1点目のところは3人の先生方にお答えいただくとして、2点目についてですが、来年度は言語Bの科目を1コマ開講します。異文化コミュニケーション学部で担当していただく予定で、来年度はドイツ語で開講される予定です。異文化コミュニケーション学部の方にはかなり無理をお願いしていることもあり、どのようになるのか、あるいは履修者がいるのかということは、やってみないと分かりません。カリキュラム上、来年度以降は英語以外のF科目を1コマ設定したので、来年度はドイツ語ですが、その翌年度以降もドイツ語に限らず、必ず1コマは開講していくことになると思えます。言語系自由科目や言語Bの方でもいろいろ科目を広げていくと思えますが、そういうものとの棲み分け等については、これからの課題です。

**筧（司会）** ありがとうございます。F科目とCLIL科目の棲み分けについては、オンラインの方からも同様の質問をいただいております。そちらにつきまして、長谷川先生に先ほどのお話を踏まえた上でのご意見をいただけますでしょうか。

**長谷川** F科目とCLIL科目の棲み分けについて、F科目は海外の大学で講義を受けているような雰囲気を作り、なるべくリアルな感じにしています。そのため、「このフレーズを使ってみたら」といったような、言語のフォローまではしないようにしています。もちろんゆっくり話しますし、Google Classroom で確実に指示を出すので、音声だけではなく、目でも確認するようにしています。それをCLIL科目で考えてみると、CLIL科目では language がその中に入っているので、いわゆるセットフレーズやボキャブラリーなどの支援もするというように、私は認識しています。

**筧（司会）** ありがとうございます。では、先ほどあったご質問の1点目に戻り、「英語のできる学生がどうしても上位になってしまうのでは」というお話がありましたが、そちらについて、導入科目ではどのような状況なのかをお聞かせいただけますでしょうか。田村先生よろしくお祈いします。

**田村** いただいたご質問は、英語スキルが高いほど最終的な成績が良くなるのではないかと、というような内容と思いますが、私の授業運営の場合、学生同士でテキストの内容をフォローし合ってもらいますので直接的に関連があるかどうかは分かりませんが、なるべく、英語スキルが高ければ良い成績評価を得られるようにならないようにしています。そもそも、私の場合、英語のスキルがどれくらいあるかについて授業でアンケートを取っていないので、実は教員側が把握していませんでした。いずれにしても、リーディングスキルの高い人がよく理解でき、そうでない人があまり理解できていない、という状況にはなりにくい運営を心がけていました。

**筧（司会）** ありがとうございます。引き続き、長谷川先生もお願いできますでしょうか。

**長谷川** 私の授業では英語力を評価していません。努力や授業への準備に対して評価しています。そういった点で、英語がそれほど上手でなくても、細かく連絡を見たり、宿題を出したりなど、まめにやってくれて頑張れば、いい成績をつけます。逆に、少し自信のある学生が休んだりして、確認をきちんとしないと成績が下がることもたくさんあります。

**筧（司会）** ありがとうございます。それでは今井先生、お願いできますでしょうか。

**今井** 私も長谷川先生と全く同じです。そもそも評価を多角的に行っているのは、やは

り英語力だけで評価をすることができないうえ、それ以外のところでも公平に評価したいという思いからです。実際のところ、ネイティブの学生が皆いい成績をとっているかというと、そういうわけでもなく、日本人の学生でも意欲的にいろいろな課題に取り組んだ方が一番いい成績を取っています。教員が心配する以上に、学生は頑張っているなと感じています。

**寛(司会)** どうもありがとうございました。それでは時間も定刻を過ぎておりますので、質問は以上とさせていただきます。最後に総合チームリーダーの後藤先生よりコメントをいただきたいと思います。

**後藤** 本日はどうもありがとうございました。3人の先生方に実践報告をお話しいただき、導入・中級・上級のそれぞれの科目で、どのような授業が行われているのか、履修した学生はどのような感じなのか、成績のつけ方はどうなっているのかなど、具体的なことを知ることができ、勉強になりました。総合チームリーダーでありながらF科目の中身を含めた全体像を十分つかんでいなかったのが、非常にありがたい企画になったと思います。

総合チームでは、今後も引き続きF科目の在り様を検証していくつもりです。その一方で、F科目の科目数が今後急激に増加することはないと思うので、先ほどご質問があったような言語系科目との切り分けなどを考えながら、F科目の授業運営やF科目として必要な科目の内容、そのラインナップなどを整理していく必要性を感じています。本日のシンポジウムで見えてきた課題を踏まえて、総合系科目だけではなく、全学共通科目全体の中で検討していく必要があると思いました。それから英語以外の言語によるF科目についてですが、先ほども申し上げたとおり、来年度はドイツ語で開講することになります。言語BのF科目を展開すると、科目編成や履修状況がどのように変わっていくのかということも、来年度以降は検証していく必要があると考えています。これについても、どのような内容を増やしていくのがいいのか検証していかなければと思います。

**寛(司会)** ありがとうございます。以上で本日のシンポジウムは終了となります。会場やオンラインでご参加いただきました皆さま、本日はどうもありがとうございました。